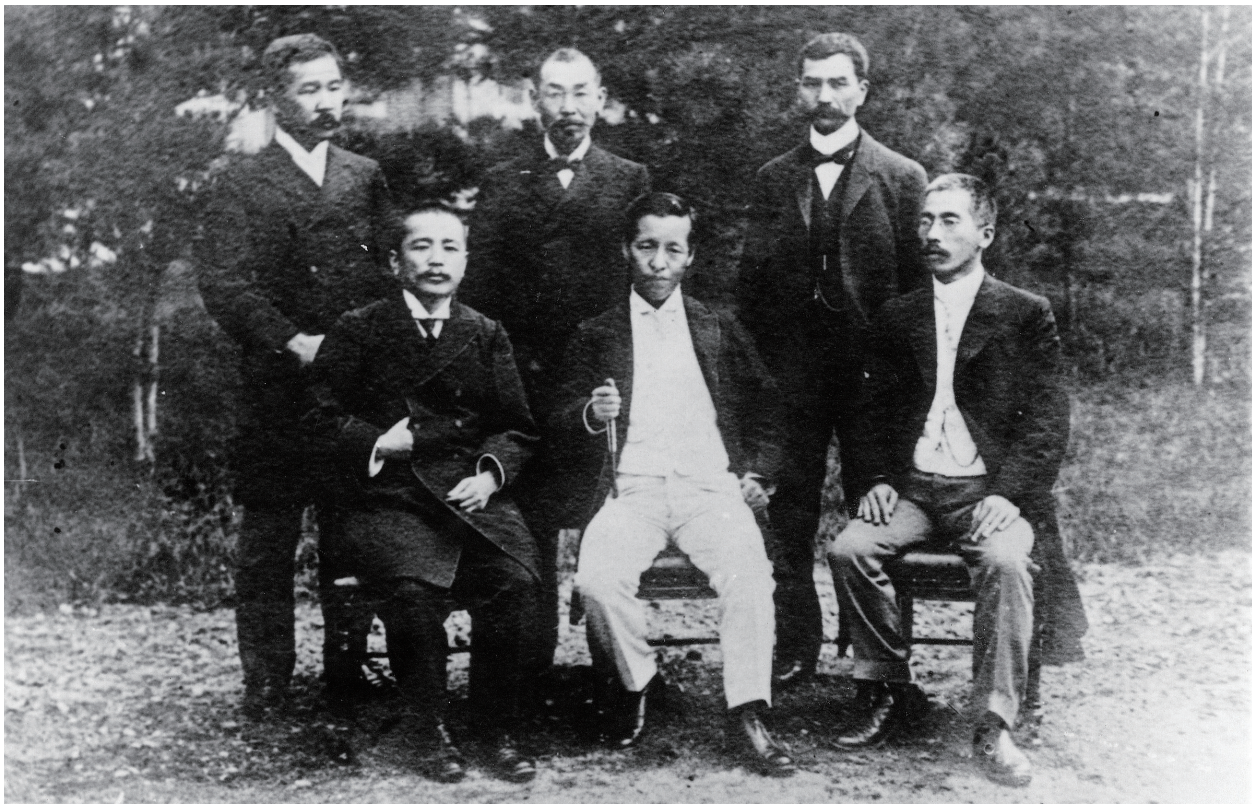
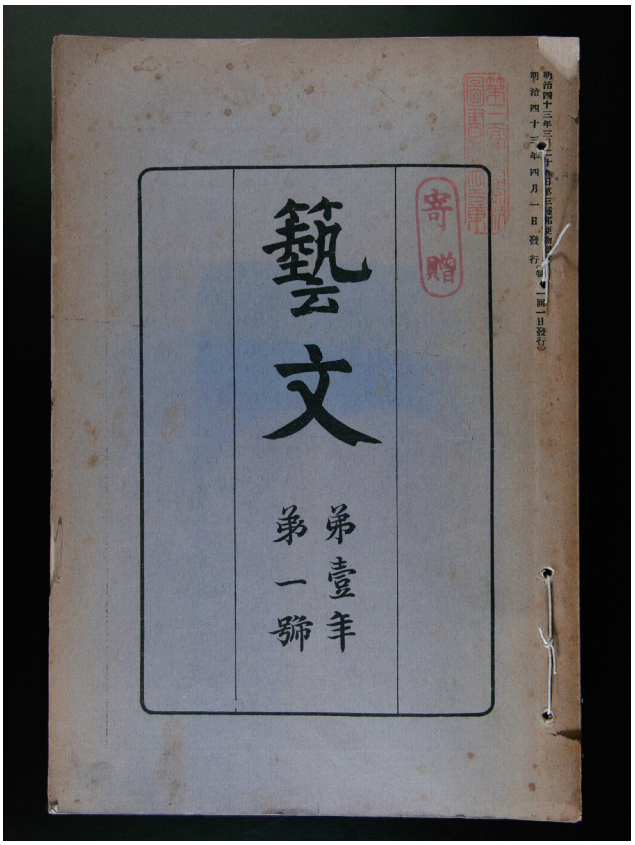
京都大学文学部の百年

京都大学大学院文学研究科・文学部

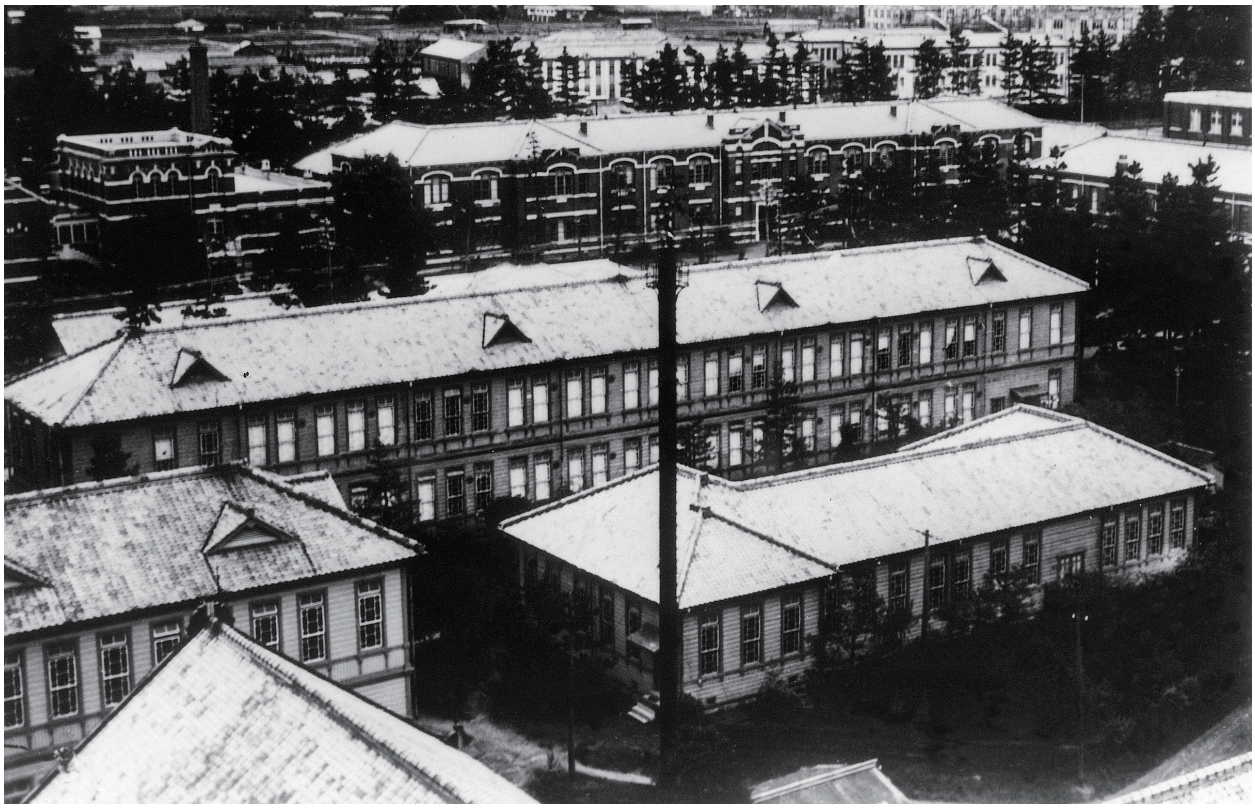
文学部新館全景



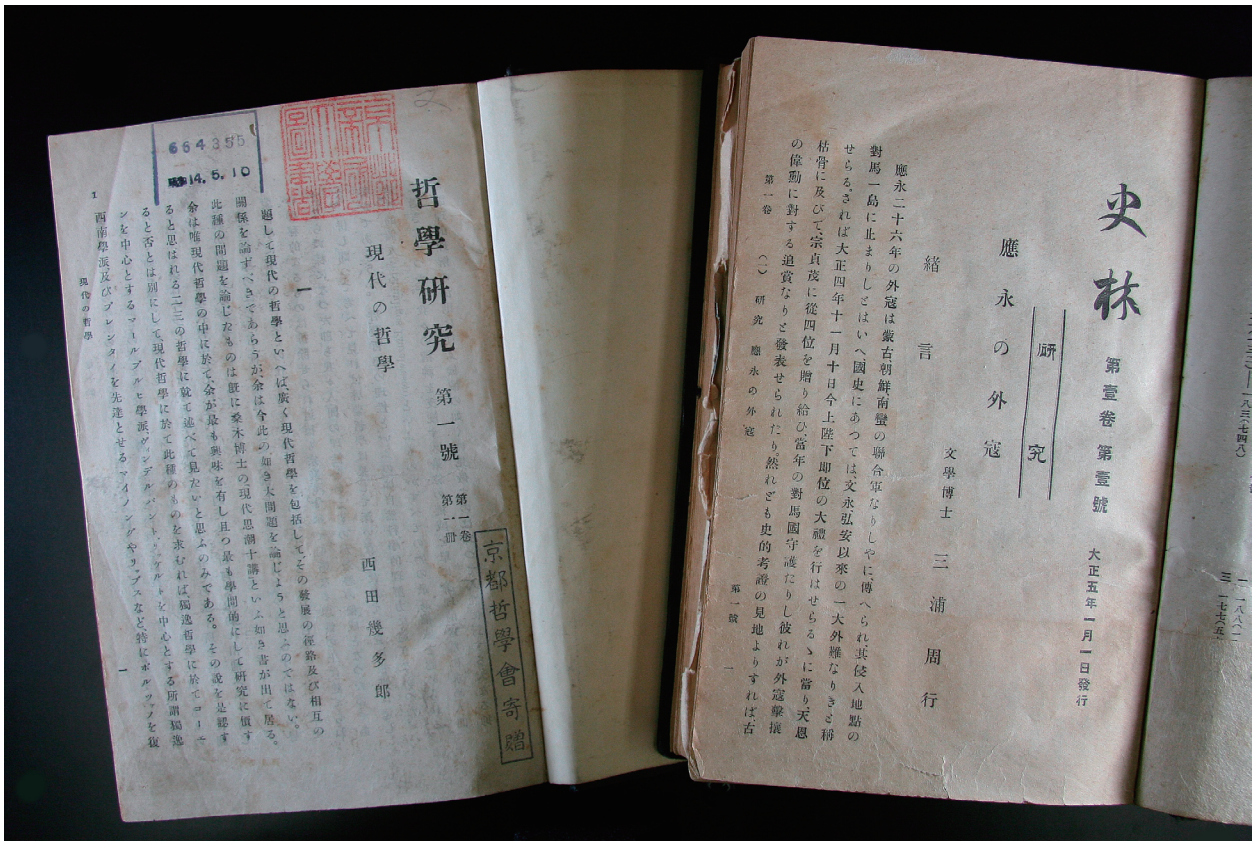
文科大学創設当時（1906 年）の教授陣（前列左から狩野直喜、谷本富、松本文三郎、後列左から桑木嚴翼、狩野亨吉、松本亦太郎）［京都大学大学文書館（以下、大学文書館）蔵］



『藝文』（1910 年 4 月発刊）創刊号



明治末期の文学部周辺（左手前に一部が見える事務室棟、平屋の心理学実験室、
そして奥の二階建研究室棟）［大学文書館蔵］



哲學研究　第一號　第一卷　第一冊

現代の哲學

西田幾多郎

一

過して現代の哲學といへば廣く現代哲學を包括してその發展の經路及び相互の關係を論ずべきであらうが余は今此の如き大問題を論じようと思ふのではない。此種の問題を論じたものは既に桑木博士の現代思潮十講といふ如き書が出て居る。余は唯現代哲學の中に於て余が最も興味を有し且つ最も學問的にして研究に値すると思はれる二三の哲學に就て述べて見たいと思ふのみである。その說を是認すると否とは別にして現代哲學に於て此種のものを求むれば獨逸哲學に於てコーヘンを中心とするマールブルヒ學派ゲッチンゲンのナートルプを中心とするフライブルヒ學派及びブレンタノを先達とせるマイノングやリップスなど特にボルツァノを復

664355
14.5.10
京都哲學會寄贈

史林　第壹卷　第壹號　大正五年一月一日發行

研究

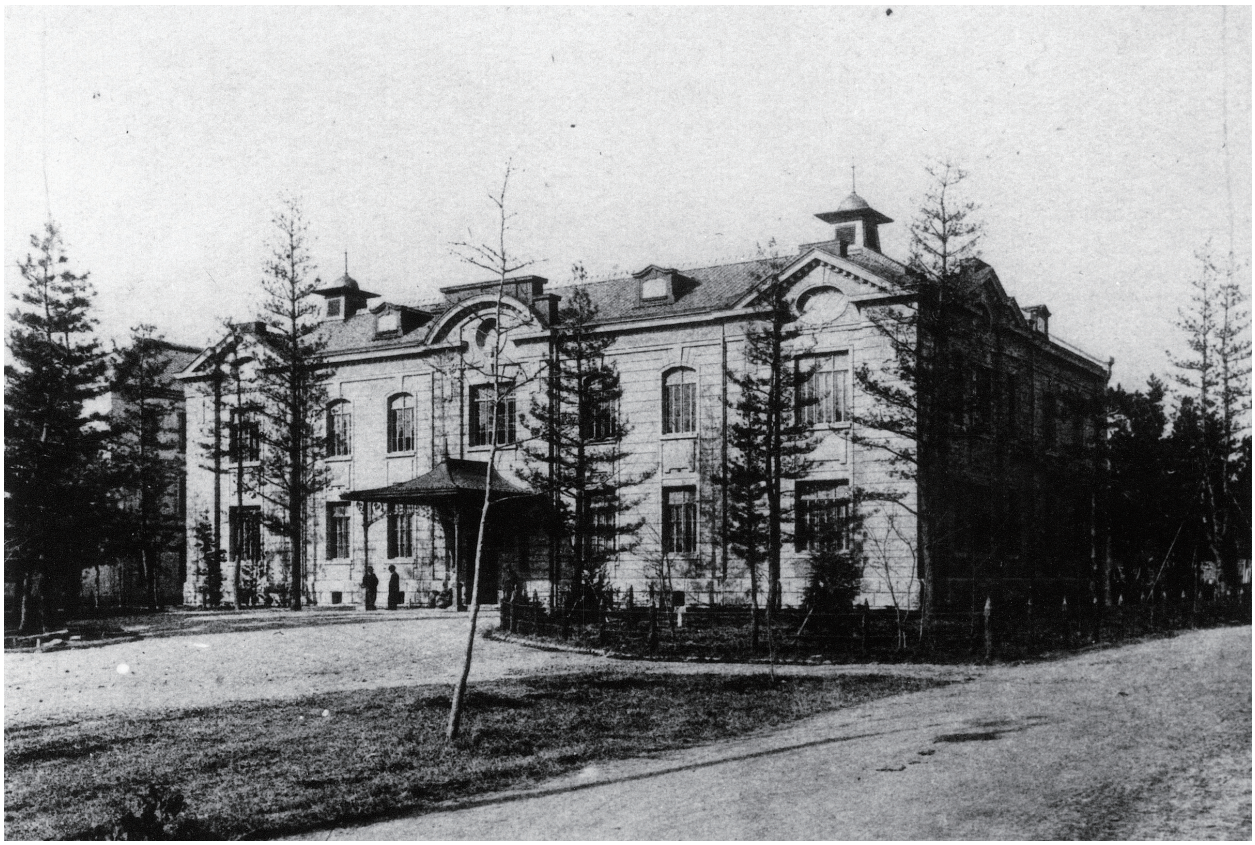
應永の外寇

緒言

文學博士　三浦周行

應永二十六年の外寇は蒙古朝鮮南蠻の聯合軍なりしやに傳へられ其侵入地點の對馬一島に止まりしとはいへ國史にあつては文永弘安以來の一大外難なりきと稱せらるるされば大正四年十一月十日今上陛下即位の大禮を行はせらるゝに當り天恩の偉勳に對する追賞なりと發表せられたり然れども史的考證の見地よりすれば古

『哲学研究』（1916 年 4 月発刊）および『史林』（同年 1 月発刊）の創刊号第 1 頁



1929 年に竣工した陳列館［大学文書館蔵］

陳列館中庭［大学文書館蔵］

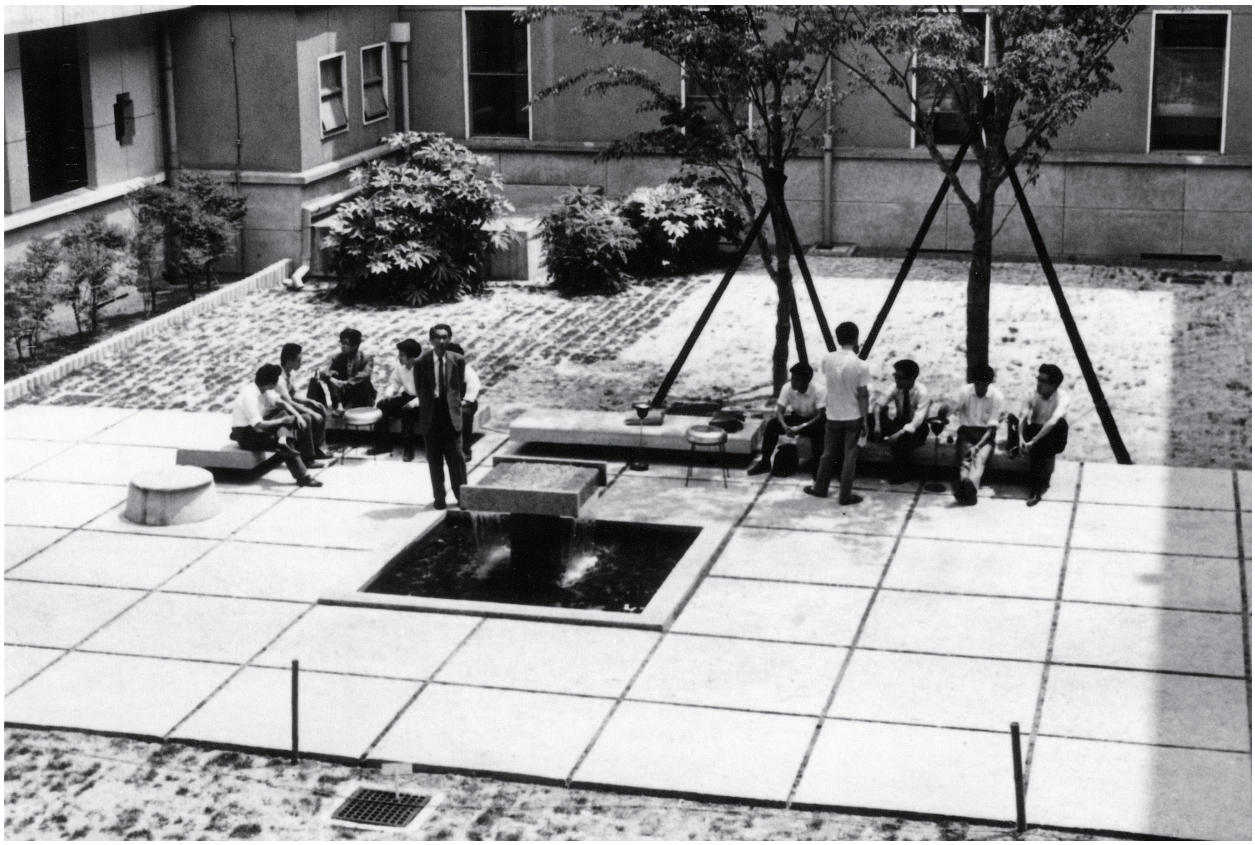
1936 年頃の東館正面部分（左）と旧本館（右）を北から望む。正面奥は心理学実験室［大学文書館蔵］

旧本館内部（文学科閲覧室）［大学文書館蔵］

旧本館正面（1956 年頃）［大学文書館蔵］

旧本館内部（哲学科書庫）［大学文書館蔵］

1965 年に完成した東館東側部分［大学文書館蔵］



東館の中庭に集う教官や学生たち（1965 年頃）［大学文書館蔵］

1966 年に竣工した羽田記念館（ユーラシア文化研究センター）［大学文書館蔵］

1986 年竣工の文学部博物館（現京大総合博物館）［大学文書館蔵］

はしがき

京都大学文学部は今年創立百周年を迎える。

百年という単位は西洋では century と呼ばれて、中世後期以来、宗教的に重要な意味をもってきたようである。一方、東洋では日本、中国とも、百年のサイクルを特別視する考えは伝統的にはなかったようであり、「世紀」という言葉も明治 20 年代に英語から作られた日本語だという。

しかし、今日のわたしたちにとって、現在が 21 世紀の 6 年目に当たり、新しい世紀の初頭であるという感じが鮮明にあるように、百年前の文学部（正確には京都帝国大学文科大学）創立当時も、たとえ「世紀」という考え方はまだそれほど定着していなくても、文科大学の発足にかかわった人々にとっては、20 世紀が始まって新しい時代が開始された、その新時代の息吹のもとでの開校、という意識があったことであろうと想像される。

百年前の 1906（明治 39）年は、わが国の歴史では日露戦争の終結翌年にあたり、文芸の世界では漱石の『坊ちゃん』や『草枕』、藤村の『破戒』などが書かれ、学術の世界でも長岡半太郎の原子のモデルや岡倉天心の *The Book of Tea* などが発表されていた。そうした文芸学問の清新な興隆のなかで誕生した教育と研究の組織が、今年で満百歳を迎えたわけである。

この慶ぶべき百周年を記念するために、いくつかの記念事業が企画されているが、その主たるものとして二つの計画がある。その一つは京都大学文学部百周年記念論文集『グローバル化時代の人文学』二巻の出版であり、もう一つがこの『京都大学文学部の百年』の刊行である。

本書には「文学部百年のあゆみ」があり、おのおのの専修によるそれぞれの研究室の歴史が書かれている。これらの歴史的な記述をひもとくと、文学部の教育や研究の営みの堆積というものが、非常に多領域に広がりながら、それぞれの部門が互いに重層的に重なりあいつながりあって発展してきた、一種の生きたモニュメントという趣をもったものであることが伝わってくる。そこには生命をもつシステムにつきものの、幾多の発展があると同時に大きな断絶もあり、それに伴う栄光も苦悩も含まれている。

しかし、こうした陰影にとんだ歴史的な厚み、重みを実際に紡ぎ出し、担ってきたのは、いうまでもなく、この百年の文科大学－文学部－文学研究科を構成していたすべての教員であり、学生であり、事務職員であり、さらには同窓会を中心とした数多くの縁ある人々である。こうした文学部を日々支えてきた人々、今は京都大学とは遠く離れた世界で活躍する人、あるいは今も京都大学のなかで活躍している人、それぞれの人々の京都大学文学部とのかかわりが、「文学部百年によせて」という総題のもとで寄せられた文集として集められている。この文集は文学部という生きた組織を、その構成員のそれぞれの意識に映った姿として切り出し、それをもう一度万華鏡のなかの像のように貼り合わせたコラージュであるともいえよう。

これから文学部・文学研究科はまた新しい一世紀へと歩みだすことになる。その行くてにどんな世界が広がっているのか。これからの将来を見据え、新しいヴィジョンを描いていくためにも、これまでの百年の歩みを常に顧みて、さまざまな発想や工夫のよりどころとしていきたいと考える。

2006 年 4 月

京都大学大学院文学研究科長・文学部長
伊 藤 邦 武